

台風19号被災リンゴ農家の経営・経済の実態と今後の対応

藤 森 洋 貴・竹 内 誠・柳 川 勝

(青森県農業経営研究所)

Damage to Apple Farmers by the Typhoon 9119 and Reconstruction of Damaged Property

Hiroataka FUJIMORI, Makoto TAKEUCHI and Masaru YANAKAWA

(Aomori Institute of Agricultural Economics)

1 は じ め に

1991年9月28日、青森県に来襲した台風19号は、観測史上最高を記録する暴風で、県内全域に甚大な被害をもたらした。中でも、収穫を目前にしたリンゴが34万5千t落果するなど記録的な災害となった。

この災害によるリンゴ農家の被害の状況とその対応等について実態を調査したので、その結果について報告する。

2 調 査 方 法

(1) アンケート調査

被害の状況やその後の対応、果樹共済への意向等を把握するために、本県のリンゴの主産地であり被害が特に大きかった弘前市・黒石市を中心とする中南地域(全13市町村)のリンゴ農家を対象に、1992年4月アンケート調査を実施した。

調査票は、農業改良普及所を通じて378戸に配布し、回答率は79.6%であった。

(2) 聞き取り調査

農家の経営・経済に及ぼした影響を明らかにするため、中南地域(12市町村)のリンゴ中核農家を対象に聞き取り調査を実施した。調査農家は、経営・経済の実績を聞き取りできることを前提に、経営規模等を勘案し、28戸を選定した。

3 調査結果及び考察

(1) 被害実態と対応(アンケート調査から)

調査農家1戸当たりのリンゴ栽培面積は約1.2haで、落果被害は976箱(20kg入り)、落果率は73%であった。落果の程度別にみると、当該年産の収穫見込み量に対し7割以上落果した農家が71%、5~7割が19%であった。落果リ

ンゴは、加工用として59%、生食用として13%が販売されたが、腐敗したり廃棄した割合も24%に及んだ。

所得の減少や復旧費用の対応については(複数回答)、融資・補助事業の活用46%、生活費の切り詰め37%、出稼ぎ36%、日雇い23%などであり、また、園地復旧や生活面において最も支えになったことについては、融資・補助事業と答えた農家が65%であった。

果樹共済については、台風来襲時に加入していた農家が30%であり、また、今後加入する意向の農家が23%で、台風を契機に共済に対する認識は高まったものと理解される。しかし、今後も加入しない意向の農家も40%あり、損害評価や共済金額等、共済制度に対する不満がその背景にあるものと思われる。

また、今後の防風対策については(複数回答)、品種構成を改善する18%、防風網を導入する17%、防風林を導入する13%などとなっており、品種構成改善の必要性や防風対策への認識も高まった。しかし、特に考えていない農家も27%あり、これは、台風19号が未曾有のものであったことと、防風対策の難しさの表れであると思われる。

今後のリンゴ園の規模については、現状維持73%、拡大したい9%、縮小したい9%で、やめる意向の農家は2%であった。被害の発生直後は、リンゴ作りをやめる農家がかなり出ることが危惧されたが、経営再建に向けた農家の力強い意気込みが感じられる。

(2) 農家経済への影響(聞き取り調査から)

調査農家の経営類型は、リンゴ単作10戸、リンゴと水稲の複合9戸、リンゴと水稲・野菜等の複合9戸で、いずれもリンゴを基幹作物としている。1戸当たりの経営耕地面積は3.4ha、うち、リンゴ園面積は2.8haであった(表1)。

果実の被害は、1戸当たりの落果量が2,568箱で、収穫見込み量3,327箱に対する落果率は77%となった(表2)。

表1 調査農家の概要

(単位: 戸、a)

リンゴ園規模		2 ha 未満	2 ~ 4 ha	4 ha 以上	調査農家平均
調 査 農 家 戸 数		10	11	7	28
経営面積	リ ゴ	166.7	257.7	477.1	280.1
	水 稲	35.0	41.0	86.7	50.3
	野 菜 等	7.0	13.6	25.7	14.3
	計	208.7	312.4	589.6	344.6

表2 被害状況

リンゴ園規模	2 ha 未満	2～4 ha	4 ha 以上	調査農家平均
収穫見込み量 (箱/20kg)	1,835.7	3,269.8	5,545.7	3,326.6
収 穫 量 (箱/20kg)	452.1	842.0	1,065.4	758.6
落 果 率 (%)	75.4	74.2	80.8	77.2
樹体の被害 倒 伏 (%)	5.7	9.2	10.6	8.3
面積割合 半倒伏 (%)	10.6	12.2	16.5	12.7

表3 農家経済の概況

(単位: 千円、%)

リンゴ園規模	2 ha 未満	2～4 ha	4 ha 以上	調査農家平均
リンゴ	農 業 粗 収 益	3,063 (45.8)	5,928 (49.6)	8,467 (40.8)
	農 業 経 営 費	3,028 (102.8)	4,642 (98.7)	10,048 (94.2)
	うち雇用労働費	233	507	3,126
	農 業 所 得	35 (0.9)	1,286 (17.7)	-1,581 (-15.7)
経 営 体	農 業 粗 収 益	3,692 (49.7)	6,938 (53.1)	11,755 (49.7)
	農 業 経 営 費	3,608 (101.7)	5,285 (97.4)	11,651 (96.3)
	農 業 所 得	84 (2.2)	1,653 (21.7)	104 (0.9)
	農 外 所 得	1,045 (100.4)	534 (285.9)	386 (116.9)
農 家 所 得	1,129 (23.0)	2,187 (28.0)	490 (4.1)	1,385 (17.8)
そ の 他 の 収 入	694	671	67	528
うち果樹共済金	680	634	67	509
農 家 総 所 得	1,823 (37.1)	2,858 (36.5)	557 (4.7)	1,913 (24.5)
借 入 金	1,856	3,725	6,929	3,858

注1) () 内は前年対比

2) 農外所得には出稼ぎ等の所得を含む

表4 融資事業等利用農家の状況

(単位: 戸、千円)

区分	リンゴ園規模 項目	2 ha 未満		2～4 ha		4 ha 以上		調査農家平均	
		利用 戸数	同左の平 均借入額	利用 戸数	同左の平 均借入額	利用 戸数	同左の平 均借入額	利用 戸数	同左の平 均借入額
利 用 農 家		7	2,651	8	5,121	7	6,929	22	4,910
内 訳	天 災 資 金	7	1,086	6	1,838	7	3,271	20	2,077
	自 作 農 維 持 資 金	4	1,400	5	2,200	6	2,483	15	2,100
	そ の 他	4	1,340	7	2,706	4	2,675	15	2,333

このため、リンゴの収益性は、10a当たりの粗収益が19万9千円と前年の47%に落ち込み、一方、経営費は、台風来襲時には大方投入済みであったため、ほぼ前年並の18万7千円となり、所得は1万2千円で前年の5%という少ない額となった。

この結果、1戸平均のリンゴの所得は12万2千円で、これに米などの所得を加えた経営全体の農業所得は70万6千円となり、前年対比では10%に過ぎなかった。

また、出稼ぎなどによる農外所得は67万9千円で前年の1.3倍に増加しているものの、農業所得の減少を補うには程遠く、農家所得でも138万5千円で前年の18%に過ぎなかった。更に、果樹共済金等を加えた農家総所得でも191万3千円で前年の25%にとどまっている(表3)。

なお、調査農家28戸のうち、果樹共済に加入していた農家は8戸で、加入農家1戸平均の共済金は178万円であった。この金額は、調査農家平均の農家所得を上回り、家計費の補填に大きく役だったと思われる。

また、天災資金や自作農維持資金等の借入れについては、22戸が利用しており、これら農家の平均借入額は491

万円となっている(表4)。

調査農家28戸平均の農家総所得に借入金を合わせた総額は577万円となり、借入金によって当面の生活資金を確保したことがうかがわれる。

4 ま と め

台風19号によりリンゴ農家は大きな被害を受けた。今後しばらくの期間、借入金の返済や経営再建に向けた努力を強いられることになろう。しかし、これほどの被害を受けながらもリンゴ農家の生産意欲は強く、本調査を行った時期には倒伏した樹の改植など復旧対策も終え、災害時の惨状は一掃されていた。被災後迅速に行われた融資をはじめとする数々の救済対策や全国の消費者から寄せられた支援などが、大きな支えになったものと思われる。

この災害を契機に、防風対策や果樹共済に対する農家の認識が高まっていることから、この機会にこれらの積極的な推進を図り、気象災害に強いリンゴ産地づくりに取り組んでいく必要がある。